物　語

「與兵衛さんとゴンゲ（権現）様」（2）

轟木下　鈴木玲子

「さあ、早く火を消すんだ！　怪我をしないように気をつけるんだぞー！」
與兵衛さんの声に励まされ、みんなは井戸から水を汲みあげ、火を消しはじめました。火事に気づいた村人たちも駆けつけ、次から次へと水をかけ、力を合わせて火を消そうとしました。しかし大勢の村人たちの必死の努力も空しく、火の勢いは増すばかり。大きなお屋敷は真っ赤な炎に包まれるようになりました。　「もうだめだ。」なすすべもない村人たちは、ただ唖然として燃え盛る火の手をみつめるばかりです。

その時のことでした。「ピー、ピーっ、ピー、ピーっ」という音が、高い木の上から聞こえてきたのです。「あれは何の音だ？上の方から聞こえてくるぞ？」　口々に言いながら音のする方を見上げてみると、ひときわ高くそびえる『いのみの木』の上に、御社の中にいるはずの真っ黒な顔をしたゴンゲ様が「ピー、ピー」と鳴いているではありませんか。「おー、あれはゴンゲ様だ。どうしてあんな所にゴンゲン様が…。そうだ。もかかしたら？」

そうです。ゴンゲン様は、火事であることをみんなに鳴いて知らせていたのです。悲しそうな目をして、燃えさかる炎をじっと見つめいていたゴンゲ様は、やがてフワーッと飛び立つと燃えている屋敷の上をゆっくりと回り始めました。そして一回りしおわると、『 **ピー ッ** 』とひときわ声高に叫び、後ろを何度も振り返りながら、名残惜しそうに西の空めがけて飛んでいきました。　屋敷は、跡形もなく崩れ落ちました。

しかし、ゴンゲ様が火事だということを鳴いて知らせて下さった為、又、それにいち早く気づいた與兵衛さんのお陰で、誰ひとりとして怪我をすることはありませんでした。

やがて、お屋敷はまた元のように立派に作りなおされ、村人も元気に働くようになりました。そして村人同士お互いに火事にならないように声を掛け合いながら、今まで以上に力を合わせて、仲良く暮らすようになったということです。

西に飛んでいったというゴンゲ様は五戸の神社に大切に祭られるようになり、今でも轟木に遊びに来るそうです。不思議なことに、いかつい顔のゴンゲ様が村に帰って来る時には、何とも言えない柔和な顔に戻ると言われています。（終わり）

轟木小學初代校長

藤澤茂助（2）

小川真氏発行「続はちのへ今昔」他より

藤澤茂助は、斗南藩から五十家族の将として上北郡六戸の柳町に分村し、百姓を始める。さらに、五戸の浦田へ移住して再び鍬を持った。。

当時五戸には**霞道場**という寺子屋があり、**轟木**の**鈴木徳彌**も通っていた。ここで**藤澤茂助**と知り合った徳彌は、その人物を見込んで茂助を轟木に招くよう父**清麓**に懇願。市川村字高丁場（現在の轟木上町内）に十四坪の仮小屋を建て、轟木の寺子屋として発足したのである。**清麓堂**である。

清麓堂では「読み・書き・そろばん」が必修で、江戸時代に農民の子弟に農業の知識等を教えるための教科書であった「**百姓往来**」や、論語・孟子が含まれる「**四書**」等を教材として、みんなが勉学に励んだ。

このような形で四年が経過した明治九年五月五日には、清麓堂が「第七大学区第十七中学区轟木小學」となり、茂助も師匠から初代校長になった。その後十五年間に亘って校長職を全うし、明治二十四年十月に死去、轟木墓地に埋葬された。茂助、六十二歳であった。

この折、薫陶を受けた教え子たちがお金を集めて墓を建てた。　**発起人**…鈴木徳三郎・卯之吉・均・松之助、奥寺忠助、風穴卯之松、松橋末吉、濱　栄　助、川村徳松・榮太郎、谷地万治、小笠原清三、向谷地篤助・福太郎。　**生徒**…鈴木市太郎・吉三郎・友吉・直吉・徳次郎・卯之松・清八・吉蔵・留吉・福太郎・清吉・此吉・参佐男・兼太郎・岩松・三蔵・長太郎・宇吉・倉之助・福松・忠治郎・吉蔵・吉松・熊吉・松太郎・辰太郎・岩冶・吉助・大次郎・芳三、奥寺儀助、小野寺久五郎・秀冶、風穴正記・鉄之助・直吉・福松・小笠原太郎の各氏。総額は十三円四十七銭。

この**墓には「生徒一同」の文字**が刻まれ、後に百石町のお寺に移された。（藤澤茂助から数えて四代目当主の**茂登**氏は、現在の「おいらせ町」に在住）

時代の波に翻弄され、明治の新政府と戦い、斗南藩と運命を共にし、畑耕す鍬を捨て、轟木の地にて人を耕し、**轟木の地の塩と化す。**古人も多く旅に死せるあり。藤澤茂助の旅はここで終えた。（終わり）　要約は、木村隆一

【追加】「市川を調べる第5号」の'市川と文化'のうち、[Ⅳ]江戸時代後期の開拓者の文の中で、開拓は「安政三年に終に効を奏し」とあるが、実際はそれ以後も続けられた、という指摘が木村彦三郎氏からありました。その通りだったので追加します。（木村隆一・奈良孝次郎）